

教員，そして書家から見る造園

The Essence of Landscaping as Sees from a Calligrapher and a Teacher

栗原 正博 Masahiro KURIHARA

埼玉県立秩父農工科学高等学校
Saitama Prefectural Chichibu-nokokagaku High School



私は「教員」と「書家」の2つの顔を持っている。農業高校で造園を教え、書家として世界を舞台に活動している。造園は芸術としても高く評価され、書道との共通点も多い。また、技術技能のみでなく人間教育をする上で有益であり、その教育的効果は高いと考えている。ここでは、教育と書道、2つの視点から造園について考えてみたい。

1. 教育的観点に立った造園教育の現状と課題

(1) 造園教育に携わって

造園は庭を作り上げ、達成感を味わえる素晴らしい科目である。農業高校では、野菜や花を生産、管理し、販売するのが一般的だが、造園は「創造する」作業になる。これは発想力や企画・計画力が豊かになるうえ、デザインセンスも磨かれる。庭づくりでは皆で協力して作業を行うため、協調性も養われる。私の主観であるが、造園系学科の生徒は学校のリーダーになる確率が高いように思える。

(2) 生徒と教員の現状

造園というと「庭師」といったイメージが強く、一昔前には先生方の手を煩わす、いわゆる「やんちゃ」な生徒が多かった。近年、学科再編により造園デザイン、緑地デザインなどのデザインを意識する学科が増え、イメージアップにつながった。その結果、庭や公園のデザインにあこがれて入学してくる生徒も少なくない。また、女子の比率も高くなり、デザインセンスに優れた生徒も多く入学してくるようになった。一方では、他の学科に比べ生徒が集まりにくい現状もあり、生徒募集で苦戦を強いられている。

教員はどうか。全国的に見て造園を専門に教えらるる教員が圧倒的に少ない。これは高校の造園系学科に対し、大学の造園系学科が少ないことが原因だと考えられる。造園の教員が不足しているところには、畜産、野菜、バイオ、食品、経済などを学んできた教員があてがわれ、担当者は素人同然で教える。一から勉強しなければならず、実習などできるはずもない。造園系学科は生産系学科などと違い、美的センスを問われるところが最も難しい点であり、教員をいつも悩ませている。

(3) 造園教育で養われる力

教育は「人づくり」でもある。どれだけ高い技術を身につ

けてもそれを発揮する場を提供されなければ活躍は難しい。だからこそ、「人としての成長」が大切であり、質の高い教育が重要と考える。私は造園を通して生徒の「人としての成長」を手助けし、「庭づくり」を通して「人づくり」に展開できる教育者になりたいと思い、日々生徒と向き合っている。以下の実話は、造園の授業がいかに人間教育に有益なのかがよく理解できるだろう。

ある実習では、いつも教員を困らせていた「やんちゃな」生徒たちが、造園の職人さんにご指導をいただき、庭づくりの技術や考え方を直に学んだ。真剣に向き合う職人さんの姿勢に影響を受け、背筋をピンと伸ばして授業に取り組むようになった結果、問題行動もなくなり学校が落ち着いた。その生徒たちは今、職人として立派に働いている。また、ある実習では、石を据え付ける授業を行った。石にはどんな特徴があり、どの方向から見れば見栄えが良いのか。ある生徒は「石も人間も一緒。一見悪いところばかり見える石も、見る方向によっては良く見える。私も人の悪いところばかりを見ないで、良いところを見ようと思う」と笑顔で語った。生徒たちは造園と「人」とを重ね合わせ、造園から人生のヒントを無意識に学ぼうとしている。



写真-1 石の据え付け実習

(4) 造園の素晴らしさと今後の課題

造園の教育力は高く、素晴らしい人材を育てることができる。指導者は造園を通して人生を教えるような感覚も持つておく

べきであり、教員だけでなく、第一線で働く造園界の皆様にも直接指導をお願いしたい。より効果が高まるはずである。また造園専門の教員をたくさん排出し、質の高い授業を展開することで、造園の技術だけでなく、人間の質も高まってくると考えられる。間違いなく造園業界は活気づく。今後は大学にもご協力いただき、造園系学科で学んだ教員を増やすことも真剣に議論していくべきである。

2. 造園と書道の共通点

私の活動範囲は日本はもちろん世界に及んでいる。作品は香港、ドイツ、アメリカなどにも飾られ、日本や海外の俳優、アーティストなど多くの方に作品を所有していただいている。こうした活動を通じて感じるのは、日本文化は外国人に非常に好まれているということである。黒と白しかない書が好まれるように、石と砂しかない枯山水も好まれる。造園と書道には共通点があり、造園の知識や考え方が書道に生きること多い。そんな観点から造園と書道の共通点を探ってみた。



写真-2 Title「298」

(1) 芸術として

私は「芸術」という視点で書を書く。文字の力を借りて自由に表現する「創作」というスタイルで作品を生み出す。文字を真似て書く「臨書」とは別次元のものである。一目観て「おもしろい」「きれい」「カッコイイ」と印象づける発想力と企画力に加え、アイディアも高く求められる。

「芸術」とは「観た瞬間に心が動く」ものだとは私に理解し、これを「感動」ととらえている。「感動」という意味では造園も一緒であり、日本を代表する庭園には、いたるところに「感動」が施されている。造園もまた、たくさんの人の心を動かすことのできる芸術性の高い文化だといえる。

(2) 心地よい組み合わせ(技法)

造園の代表的な石組では、石と石を直線で結ぶと不等辺三角形になる。書道でも「墨を継ぐ(墨を筆に含ませて書く)」位置で同じ技法が使われている。文字を書けば墨がなくなり擦れ、墨を継いだ直後に書いた場所は他よりも黒くなる。そ

の黒い部分を直線で結ぶと不等辺三角形になる。

日本庭園の作庭方法と同じで書道も画一的なものを嫌い、「大・中・小」「濃・薄」「強・弱」「太・中・細」など、不揃いなものの組み合わせで構成する。その組み合わせがうまくいったときに人の心を動かす作品ができる。

枯山水式庭園の「図と地」の関係、特に余白をうまく生かした空間づくりは見事で、心地よさを感じる。書道も余白を生かした間(ま)が大事であり、作品を構成する大切な要素である。芸術としての価値を高めるために、書道が造園から学ぶべきことは、その余白や間の取り方であろう。

私は、造園に触れ、感覚的に余白や間の取り方を習得してきた。それが今、作品作りに生きていることは間違いなく、造園を学んでいたからこそ第三者を感動させられる作品を生み出せていると言っても過言ではない。

(3) 誰の視点で作るのか

一般に画一的な構成の「臨書」作品に対して、自由度が高く、大胆な構成ができる「創作」作品は人気が高い。

これを造園に置き換えたらどうか。画一的な庭園＝「臨書」と、自由度の高い庭園＝「創作」ではどちらが人気なのか。好みが分かれるところだが、私は「ワクワク感」の感じられる後者を選びたい。観る人、使う人目線で考え、自由な発想を武器に「楽しさ」を創出する素晴らしい演出が可能だからだ。

振り返って、画一的な構成が好まれる書道界に、自由な発想から生まれた造園的な「楽しさ」を加えることができれば、きっと書道界の発展にも寄与していくであろう。観る人の視点に立った作品作りは、造園から学ぶべきものがたくさんあるようだ。



写真-3 Title「編む」

(略歴)

栗原 正博(クリハラ マサヒロ)

埼玉県立秩父農工科学高等学校教諭。1976年群馬県生まれ。高校時代に甲子園出場。東京農業大学農学部造園学科卒業後、造園教育に20年携わる。全国高等学校造園教育研究協議会理事として「だれでもわかる安全な造園作業」を編集。

栗原 正峰(クリハラ セイホウ)

書家。祖父の雅号を継ぐ2代目。現日会同人。書道グループ風草舎代表。ル・サロン、サロン・ドトーンヌ入選。いせさき教育アンバサダー。小・中・高校で講演多数。